

32 ボブ・ディランはいま何を考えているか

ある時、ふと気づいて愕然とすることがあります。最近では自分の年齢が「踊る大捜査線」（1997年放送）の「和久（わく）さん」と同い年になっていたことです。演じていたのはドリフターズの故いかりや長介氏。退職4か月前で少しやる気がなくなってきた所轄刑事という設定でした。私のやる気はさておき、私も「役職定年」の年になったのですが、さまざまなことの納めかたをここ数年ずっと考えています。大好きだったCDや本も限られた時間でもう一度はまるかどうかを考えて、手離し始めています。それでも音楽や文学は新しい才能に気づいたらつい欲しくなってしまうのですが、落語は（私感ですが）昔のものがいいに決まっているので、手元のものが増える心配はありません。つまり、新しい才能を探す必要はないし、古典落語の音源は当時のラジオ放送などがほとんどで、未発掘のものはまずありません。山下達郎氏も古典落語を聞きながら寝ているとラジオで語っていましたが、私も手元のものを引っ張り出しては楽しんでます。

さて、古典落語の名人の一人、桂文楽師匠は1971年8月31日、国立劇場での高座の途中、「神谷幸右衛門」という人物名が出ずに絶句してしまいます。間が空いてしまった後、文楽師匠は客席に深々とお辞儀をし、「申し訳ありません。もう一度勉強し直して参ります」と挨拶を述べると静かに舞台を降りたそうです。高齢になっていた師匠はいつかこういう日が来ることを予想して、お詫びの言葉の稽古まで重ねていたと言われていますが、これ以降二度と高座にあがることはなかったそうです。8月24日の朝日新聞で山田洋次監督が、寅さんシリーズ最後の出番で名優笠智衆氏が短いセリフなのに詰まって出てこなかったことに触れ、高齢の役者のセリフ忘れを「つらい宿命」としながらも、「どんなに悲しかったらう」と書いています。こうしたエピソードが身につまされる年齢になったとつくづく感じています。

実を言うと、このエッセイは12月を最後にして、残りの月は前任校で書いたものを再掲するつもりでいました。ちなみに最後のエッセイは「自分の好きなもの」を書き並べて終わりにするつもりでいました。このアイデアは、森永博志氏がラジオ番組「サウンドストリート」の最終回（1981年3月31日放送）で、好きなナンバー8曲だけをかけて放送を終わらせたのが元ネタです。その時の最初の曲はボブ・マーリーの「そっと灯りを消して」で、最後の曲はローリング・ストーンズの「イッツ・オンリー・ロックンロール」でした。2年半続いた放送の最後でほとんど何もしゃべらず、好きな曲をかけるだけで締めくくって、すごくカッコ良かったと記憶しています。また、ピチカート・ファイブの小西康陽氏をプロデュースに迎えたかまやつひろし氏のアルバムにも、好きなものの名前だけをひたすらあげるだけの曲がありました。始めにあげたのが「クリュック（最高級シャンパン）の凍る寸前のやつ」で、これもオシャレでカッコ良かったのですが、よくよく考えてみると、このアイデアは著名人だから成り立つもので、田舎の、地味なおじさんが一番やってはいけないことの一つだと今さら気づきました。ぎりぎりセーフです。とにもかくにも、その時の文楽師匠は79才。ついでに言うならファーブル昆虫記1巻の刊行はファーブルが55才の時、最終巻は83才でまとめたそうです。私もあと20年は頑張らないといけないわけですね。あっ、83才になったディランのことを書き忘れていました。とりあえずまた来月。 令和6年11月1日 大村城南高等学校長 中小路尚也